

## 一八四八年とイギリス

— J・S・ミル 社会思想の一視角 —

久留島京子

## (1)

J・S・ミルの生きた一八〇六——七三年という時代は、錯綜した対立の中にも次第にブルジョアジーの勝利が確立され、かの動乱の四八年をさかいとして、その後ははなやかなヴィクトリア王朝の繁栄に入つてゆく、そういう時代である。

繁栄は、しかし、世界の工場となつたイギリスのすべてではない。

それはまた、今や確立された資本主義的諸関係の中において資本主義的秩序の矛盾がおおいがたく意識されるようになってくる時代でもある。即ち、一八二五年を最初とする周期的な恐慌の勃発及び労賃と利潤との露骨な対立——。三二年におけるブルジョアジーの政治的権力の把握は、一方において労働者階級の斗争の理論的にも実践的にも尖鋭化した形態となつてあらわれる。イギリスだけではない。むしろ、大陸の諸国においてはその後進性のゆえに資本主義的秩序の矛盾は、イギリスに比してより急速、激烈にあらわれざるをえなかつた。一九世紀に輩出する思想家は、いずれもそれぞれの立場からこの社会の新しい事態をながめ、そこに発生し來つた新しい社会問題にとりくんだ

のであつた。

この様に確立されたとはいえ、ブルジョアの体制に矛盾する様な新しい社会的条件がつくられつつあつた時に、輩出する思想家の中に注目すべき二つの方向がうち出される。一はJ・S・ミル——二月革命の勃発と前後してロンドンにおける『経済学原理』(Principles of Political Economy)の刊行であり、一はマルクス——革命後のロンドンにおける『共産党宣言』(Das Kommunistische Manifest)——最初の理論的組織的な共産主義の発足である。前者は資本主義の非をみとめながらもなおかつ最良の制度としての、それへのゆるぎなき信頼にもとづいて社会主義との調和——折衷をこころみたものであり、後者はいうまでもなく資本主義を否定し新しい社会への構想をえがき出したものである。

マルクスとの対比はここでのテーマではないが、それを念頭において上でわたくしは以下において、ミルの思想体系を検討してゆこう。

ミルの思想は『ベンサム論』(“Bentham”, 1838)『コールリッジ論』(“Coleridge”, 1849)『論理学体系』(“A System of Logic”, 1843)などをへて、『経済学原理』において集大成される。その後におい

『自由論』(“On Liberty”, 1859)『功利主義』(“Utilitarianism”, 1863)『社会主義論』(遺稿 “Chapters on Socialism”, 1879)などの諸著が執筆されるけれども、その骨子はすでにきづかれていたものであり、一八四八年『経済学原理』をもつて彼の体系の成立としてとらえることができよう。

ミルについてはわが国でも経済学説史の上で大きな視野をもつてその体系を問題にする新しい研究がなされているが、<sup>①</sup>わたくしは彼の社会思想の形成過程を眺めながら、全体としての体系の性格と意義を検討したいと思う。

そのさい敘述の中心は彼の思想の根底であり、社会体制解明の基準としての位置づけを与えられる社会哲学におかれる。

ところで、ミルがその中に育ちその後継者たるべく教育された社会哲学たるベンサミズムは、一八世紀以来のイギリスにおいて支配的であつた。しかし一九世紀に入ると、これに対する新しい思潮の攻撃が二つの方向からつよくなされてきた。一は社会主義思想(主としてフランス社会主義)他はコールリッヂによつて伝えられたドイツ歴史主義である。この二大思想との対決がミルの社会哲学の形成される過程であり、それは彼の所謂「精神の危機」を通じ、さらにそれ以後四〇年代における課題となるのである。

この課題に直面して、彼は社会科学の方法論を確立することを迫られた。その結実は一八四三年の『論理学体系』における社会科学方法論であり、四八年の『経済学原理』において具体化される。そこでは『原理』の副題——Principles of Political Economy, with some of

their applications to social philosophy, 経済学原理、および社会哲学への若干の応用——にも示される様に、新しい方法論のもとに、社会哲学とかかわらしめて社会の経済現象を説明する試みがなされたのである。

わたくしは、まずミルにおける社会哲学の形成をあとづけ、次にその社会科学方法論を検討することを通して、彼の体系を考えてみようとおもう。

ところで彼のみつめた問題は何であつたか。その体系をうみ出した背景としての、イギリスの条件は何であつたか。本論に入るまえに、その点に関する若干の考察が必要とされるであらう。

① その最も代表的なものは、杉原四郎『ミルとマルクス』(一九五七年)。

ミルにおける社会主義との対決という問題を中心にして、マルクスと対比せしめつつその体系を把握しようとしたこの書は、日本におけるミル研究の最も注目すべき業績といえよう。他に行沢健三「社会哲学への復帰——一八四八年とJ.S.ミル」(出口勇藏編『経済学史』一九五三年、所収)。

## (2)

ミルの時代を考える場合、一つのメルクマールは一八三二年におくことができよう。即ち、三〇年代にはほぼ完成する産業資本の再生産軌道への定置Ⅱ資本主義的諸関係の成立Ⅱブルジョアジーの制覇は、三二年の選挙法改正によつて集中的に表現せられる。腐敗選挙区の廃止または定員の削減およびマンチェスター、リーズ、バーミンガム等北方都市の定員の増加、年一〇ポンド以上の家賃を支払う借家人への選挙権拡張——。これは明らかに土地所有層に対する、都市的ブルジョ

ヨア的要求の勝利であるとともに、選挙権獲得におけるプロレタリアートの排除を意味する。産業革命の過程を特徴づける三階級への完全な分化は、この段階においてプロレタリアートのブルジョアジーからの分離<sup>11</sup>対立の尖鋭化を、とりわけ表面に現出しながら錯綜した対立関係をみちびき出す<sup>12</sup>。三二年以後の動向の基調はまさにこの点にもとめられねばならない。

即ち、「改正法案は民衆の威力によつて通過した」のであり彼らにとつて「普通選挙が目的であつた」<sup>13</sup>にも拘らず、普通選挙はおろか三四年には救貧法を投げ与えられた労働者の失望、憤激は次第に階級的自覚に高まつてゆき、やがてより組織的な運動へと向つてすすんでゆく。これがチャーティストに結集されるのであり、普通選挙権、無記名投票など六ヶ条の政治的要求をかかげた斗争が行われるにいたつたのである。

一方、勝利したブルジョアジーは三九年「反穀物法同盟」を結成する。これはイギリス自由貿易運動の主流をなすものであり、「穀物法」の廃止をめぐる抗争はブルジョアジーと土地所有層との決戦を意味するものであつた。四六年、土地所有層の狂熱的な反抗にも拘らずトーリー派の首相ピールの協力による穀物法の撤廃、棉花その他の原料に対する輸入税の廃止等は三二年の選挙法改正によつてとられた段階の完成を示すものに他ならない。更にピールによるトーリー陣営の分裂も、実際には新旧両支配階級の統一を意味したのである。<sup>14</sup>しかし、支配層としての両者の結合が明白になるのは「一〇時間労働法案」の通過後においてである。即ち、復讐にもえたトーリー派の、労働者階級

との結合は一時的なものであり、今や清新なるプロレタリアートという敵に対する、新旧両支配階級の結合が必然的となる。プロレタリアートに対する、ブルジョアジーと土地所有層の「妥協」——ここに三二年以後の階級再編成の完成をみる。

更に三八年以後ひきつづいた不況は四二年にいたつて略々一段落をつけ、四四—五年には好況の一時期が来たのである。ヴィクトリアニズムはまさにじまりつつあつた。世界の工場としてのイギリスの地位は確立され、植民地帝国の形成はすすめられてくる。一方における四二年の弾圧以後の労働運動の不調は、他方においてたとえばロッチデール・パイオニアズ<sup>15</sup>の発足(四四年)のごとき、資本主義的秩序の受容となつてあらわれる。四八年革命の余波をうけて高まるかにみえた労働過動も不調のうちに終り、実は経済主義的に資本の運動の中にくみいれられてゆくのである。<sup>16</sup>

ミルが『経済学原理』を執筆したのはまさにこの様な時期であり、一方には無視しえぬものとしての労働者の要求が存在しながらも、なおかつ資本はその不動の地位をえていたのである。従つてミルにとつての問題は、当時のアキユートな労働問題の解決という点であり、彼の思想体系もその強烈な時代感覚にささえられていたものといえよう。しかもイギリス資本主義はもつとも順調な発展のコースを辿りはじめる時期に位し、労働運動は一つの転回点にあつた。従つて、ミルは資本主義に対しては改良の必要をみとめても不信を感じることもなく、労働問題に対しては対策を必要としても不安を覚えることもなく、彼自身にとつて科学的、良心的に考察をこころみることができたので



あつた。

主題にたちかえつて、わたくしはミルの思想の形成をながめてゆく。

① ウェークフィールド『イギリスとアメリカ』中野訳(1)即ち、「彼ら(労働者階級―筆者)は改正法案を是認したか。一つの方便としては是認した。しかしそれは単に一つの方便としてであつて、もしそれが最後の策であるとすれば、このような法案はない方がましであると彼等は宣言した……」。(一六九―七〇頁)

② G・D・H・コール『イギリス労働運動史』林他訳、二一五頁。

③ 近代的協同組合はロッヂデール・パイオニアズを以て始点とする。一八四四年、二八人の組合員、二八磅の資本を以て始められたこの協同組合は、一六年後には三四五〇人の組合員と三万五千磅の資本を有するまでに発展した。ミルはこれに大きな期待をよせ、社会を漸進的に変化せしめる最も有効な方法と考えた。協同組合運動について詳しくは、コール前掲訳書三〇―四一頁、および Principles of Political Economy, edited by W. J. Ashley, 1923, pp. 772~92. 戸田正雄訳、IV、一二二―一五四頁。

④ イギリス労働運動は一九世紀の中葉、即ち、この四八年ころに一つの転回点に到達する。それまでの(一九世紀前半を特徴づけていた)労働運動は二つの方向をもつていた。即ち、一方には経済的要求をかかげる微温的方向、他はアナキー的運動の方向。前者は一般に没落しゆく小生産者および比較的安易であり猶弱体であつた熟練労働者によつて代表せられ、後者はラッダイト、ストライキや叛乱となつてあらわれた貧窮な労働者によるアナキー的な後向き資本主義否定の方向であつた。(アナキー的運動は、しかし三〇年代より徐々に崩壊し、四二年を一劃期として四八年ころには殆ど消滅。)

この様な方向が一つの転回点に到達し、アナキー的方向の消滅、経済主義的方向の伸張となつてあらわれてくることはまさに当時におけるイギリス資本主義のエポックⅡ世界の工場としての、イギリス大工業制度のゆ

るぎなき確立に伴うものである。今や資本はその二本の足の上に立上つて安定した自信を以て蓄積をつづることが可能になる。それとともに資本に對する労働者の盲目的反抗も、この安定した秩序を与えられたものとして受容しようとする動きにとつてかわられてゆく。即ち、一九世紀後半の労働運動は、協同組合の勃興と五一年を起点とするニュー・モデルの労働組合によつて特徴づけられるのである。

### (3)

ベンサミズムは「最大多数の最大幸福」というその目的に関するかぎり、ミルのせばねを貫くひとすぢであつた。けれども、この一八世紀的思考は新しい時代の新しい問題に直面し、新しいいくたの思想に接したミルによつて大きな変容をこうむらざるをえなかつた。

最大多数の最大幸福に對するベンサムの確信がかれを駆つて社会改革者として立たしめた。ミルはいう、

「一八二二年の冬、私が初めてベンサムをよんだ時から……私は真に人生の目的とでも云い得るものを抱いていた。即ち、一個の社会改革者となろうという志を立てたのである。自分一個の幸福についての概念は、全然この目的と一体になつていた。」

しかし、彼のいわゆる「精神の危機」を通過した後のミルは、幸福が人生の目的であるという信念においては少しも動揺しなかつたが、今や「この幸福という人生の目的にも、それを直接の目的とせずには置かなければ、決して到達し得るものではないと考える様になつた」のである。<sup>⑤</sup>「自分一個の幸福以外何か他の目的物、即ち他人の幸福とか、人類の改善進歩とか、乃至は或技術、若しくは職業と云つた様なもの

さえも、それを自己の幸福の手段としてでなく、それ自体を理想の一個の標的として専心する場合、何かそうしたものに自分の心を据えている人達のみが幸福なのである……」<sup>③</sup>

即ち、あくまでも幸福を目的としながらも自己の幸福＝利益以外の何ものかを見出さなければならなくなる。自己を没却することによつてはじめて幸福がえられるということを悟つたのである。ここに自意識の没却→利他心が問題にされてくるのである。<sup>④⑤</sup>

次に、ミルは内的教養を重視する。

自伝に云う、「私の思想の受けた今一つの重大な変化は、私が初めて人間の幸福の第一要件の一つとして、個人の内的修養の本来価値を認識したことである。……私は今や、受動的な感受性は能動的な能力と同様に開発されるべきもので……あることを経験上悟つたのである……感情の陶冶は今や私の倫理的、哲学的信条の基本点の一つとなつた。」<sup>⑥</sup>

ベンサムの理論はこの様な「人間の有し得る精神的感情全体の約半数の存在を看過」しているが故に、極めて大きな欠陥をもつというのである。<sup>⑦</sup>

この様にして、彼は内的教養の必要を説くにいたつた。(感受性の涵養は人間の幸福のために必要であるから。)

ここにおいて、すでにミルはベンサミズムを大きく修正した。利己的動機によつてのみ人間は動かされるのではない、ということとは功利主義の中核への打撃であることはいうまでもない。と同時に内的教養の重視も亦、ベンサミズムからの脱却である。この様にベンサミズ

ムの一面性をつよく意識するようになった時、彼はコールリッツを通してドイツの理想主義的、歴史主義的な思想にふれるのである。

彼は『ベンサム論』の冒頭に、現代イギリスにおける二人の偉大なる基本的思想家としてジェレミー・ベンサムとサミュエル・テラー・コールリッツをあげている。即ち、ベンサムは「現存の思想制度と相対立する真理を一層詳細に認識する能力」をもち、コールリッツは「現存の思想制度の内に存在する閑却された真理を闡明する能力」を有していたというのである。<sup>⑧</sup>

ミルは人間と社会との研究においてたえずつきまとう危険は、「虚偽を真理と誤認することではなくて、寧ろ真理の一部をその全体と誤解することである」と主張する。<sup>⑨</sup>

「社会哲学に於ける過去又は現在の主な論争は、殆んど全ての場合に於て、双方が彼等の否定する点に於ては誤まつているが彼等の肯定する点に於ては正当であるということ、また孰れの側にせよ若しも己れの見解の上に相手の見解を添加することが出来たならば、その学説を完全にする為にはそれ以上に殆ど何物をも要しない程であつたろうということ、これは恐らく承認され得る命題であると思われる。」<sup>⑩</sup>

ベンサムは認容された意見の外部から、旧い意見または認容された意見のあらゆるものについて「それは果して真理であるか」を問題とし、コールリッツは内部から「その意味は何であるか」を自問した。彼らは異つてはいたが、いずれも真正な論理的方法を用いて考案した。従つて、前者は伝統的な意見内部の真理を看過し、後者は伝統的な意見以外の真理を看過したとはいえ、あらゆる点において、二人は相互にと

つこの「相補う補完者」であり、互に相対応し合つて完全へとちかづくのである。従つて、精神と科学の不完全な状態においては対立する思索方法は重要な意味をもち、両者いずれの意見においても「肯定的部分は凡て真理である。」<sup>⑩</sup>

コールリッヂは、いかなる学説にせよそれが思慮ある人々によつて信じられ、全ゆる国民または幾時代もの人類によつて受容れられてきたということを重くみて、伝統的思想のうちに存する真理を眺めようとしたが、(それは伝統的なものの外にある真理を認めないという欠陥をもつたにせよ) 又この派の人々の功績は、過去半世紀にわたつて歴史の上に「燦然たる光明」を投げたことだという。即ち、それ迄無視されてきた歴史は、原因結果の連鎖による一つの科学となつた、過去の事実と事件とは「人類の徐なる進化の途上における一つの意味と一定の明瞭な位置」とをもたせられたものである。こうしてミルは、ドイツ流の歴史哲学を身につけることになるが、それは後述する動態観の基礎をつくることにもなる。

更にこのコールリッヂ論において示されることは、ミルが一つの主義への固執をはなれてどんな意見でも一部の真理を含んでいれば、それを受容れようとする柔軟性をもつ様になつたことである。こうした根本的な態度をもつて彼は当時の思想を見直そうとしたのである。それはベンサミズムへの批判となり、更にまたサン・シモン派の受容となつてゆく。

① Autobiography—The World's Classics Edition. P. 112. 西本正美訳『ミル自伝』一六二頁。

② ibid. P. 120. 同書一七二頁。

③ ibid. P. 120. 同書一七三頁。

④ この点に関しては、『ベンサム論』『コールリッヂ論』の訳書である塩尻公明訳『ベンサムとコールリッヂ』の訳者序説に詳しい。同書四二—五頁参照。

⑤ これを、ベンサムにおいて赤裸々にかたられたブルジョアの利己心の主張(人間の道徳的行為の基本的動機「エゴイズム、個人的考慮」と比較せよ。ベンサムの段階は資本主義経済の発展期であり、そこでは利己心にもとづいて各人が行動することが社会の生産力を向上させ、最大多数の最大幸福を実現することでもあつた。ところがミルの段階では、資本主義的な秩序の矛盾はおおいがたく、この制度に対する改良が要望され、も早自己の利己心にもとづいて快楽だけを追求することに対して疑問がもたれてくるのである。ミルの思想の変化、ベンサミズム修正の一面も、かかる背景を反映したものとしてとらえられるべきであらう。

⑥ Autobiography, pp. 121—2. 前掲書一七五頁。

⑦ 『ベンサム論』塩尻訳前掲書三八頁。

⑧ 『ベンサム論』同書二頁。

⑨ 『コールリッヂ論』同書八五頁。

⑩ 『コールリッヂ論』同書八六頁。

⑪ 『コールリッヂ論』同書八七頁。

#### (4)

一八世紀の思想家は社会を静態的にとらえても、動態的にながめることを知らなかつたために(ベンサムも、そして亦父ジェームズ・ミルも)歴史を正しく見る眼をもたなかつた。すでにコールリッヂによつて示唆を与えられたミルに「人類の進歩の自然の順序」に関して、大きな影響を与えたのはサン・シモン派の人々、とりわけコント(のちにはその派からわかれたが)であつた。<sup>①</sup>



自伝にはコントの所謂三段階説（人間の知識のあらゆる部分は神学的、形而上学的、実証的な三段階をへて進歩する）について高い評価を与えているが、これは人間と社会が不断に進歩するものであるという理解をもつて、社会主義をうけ入れる立場をつくり出す。

社会主義思想、とくにサン・シモン派の思想はミルに大きな影響を及ぼした。一八三〇年ころのこととして、自伝には次の様にのべられている。

「自由主義の通説に対する彼等（サン・シモン派——筆者）一派の批評には、重要な真理が多分に含まれている様であつた……彼等一派の人達が徐ろに展開し來つた社会組織、即ち、社会の労働と資本とが社会全体の利益の為に運用されるようになり、各個人は皆、思想家なり、教育者なり、芸術家なり、生産者なりとして必らず労働の分前を負擔するを要すると共に、皆その能力に応じて類別され、その仕事に応じて報酬を受ける様になると云う社会改造の計画は、私にはオーエンのそれよりも、種類に於て遙かに優れた社会主義である様に思われたのである。彼等一般の手段は如何に実効なきものであつたにもせよ、その目的は私には望ましいもの、合理的なもののように思われた。……」<sup>①</sup>

この様にサン・シモン主義への同感を示しているが、さらに『経済学原理』第二部、分配論の初めの二章「財産論」の中で、とくに社会主義について考察を行っている。<sup>②</sup>

即ち、「公平な立場」から両制度（私有財産制および共有制）を批判しようとするミルは、共産主義・社会主義に対して放たれる非難に対して一々反駁をなしている、——即ち、それらが誇大されている程に

個人の自由を奪うものでもなければ労働への活気を損ずるものでもなくて、むしろこれらの制度は、現在のイギリスやその他の国々における一般労働者の、職業選択や住居の移転の自由の欠除、規則や他人の意志に依存する束縛などの「準奴隸的」状態に比しては頗る自由であるうし、「労働の割当ての不公平の甚しさ」および「労働の所産は労働の分量に殆んど反比例して分配される」私有財産制の現状に比して、余程労働への活気を促進するに違いないであろうといつてゐる。<sup>③</sup>

けれどもそれは又、次の様に展開されてゆく。即ち、共有制と私有制とを正當に比較するには、最良の状態の共有制と現在の如きものではない理想的な私有制とを比較しなくてはならない。しかもいかなる制度、法律にせよ、次の二条件が具わるのでなければ、必ず大衆を衰退窮乏に陥れてしまふ。即ち、その条件の一は教育の普及であり、他は社会の人口の適當な制限である、と。<sup>④</sup>

この二点は社会改革を問題にするさい、常に貫かれる彼の立場である。教育によつて人智が向上しなければ社会改革はなしえない（この点については次節に詳述）又、仮に社会制度を変えても与論や教育が向上していなければそれは成功的な結果を生まない、ということがその根本の立脚点となる。人口問題も、教育が普及して理知を具えた人々が人類の将来に思いを致す様になつてはじめて解決する、という。

彼はマルサスの人口論に全面的な賛意を示し、それにもとづいて次の様に論をすすめる。——およそ労働者階級の低賃・貧困は、その人口が支払われるべき労賃の総額に対して多すぎるからである。従つて「労働者階級にとつて重要なものは蓄積または生産の絶対量でもな

ければ労働者へ分配される資材の量でもなく、この資材とこれが分配される人数との割合である。」この様な論拠から、労働者階級はその人口を制限する以外、いかなる企画、運動を以てしてもその悲惨な状態を脱することはできないという結論がみちびき出されるのである。<sup>③</sup>

この様に論じ来つて彼は、両制度いずれがすぐれているかは今すぐ解決のつく問題ではない、しかし敢えていうならばその中いずれが最も多く人間の自由・自由意志を容れるかということが比較の基準になる、という。

そこで彼にとつて問題となるのは次の様な事柄である。即ち「共産社会においては個性の伸張（傍点筆者）が行われるかどうか。輿論が人々を極端につなぐようなことがないか。社会全体に各個人が絶対に服従し、社会全体が各個人を監視する結果、すべての人々の思想、感情、および行動が均一なものになつてしまわないであらうか。」

社会主義・共産主義を実現不可能とはいえないけれども、猶この様な危惧を示しながら結局将来の見透しとして、人間のゆきつく窮局のところを限定することはできない——といいつつ、しかし最後にミルは断言する。即ち——人間の進歩の現段階においては、主たる目標は私有財産制度の顛覆ではなくてその改良、およびこの制度の恩恵への社会成員の充分な参与ということにおかるべきである——と。<sup>④</sup>

かくて私有財産制に対する信頼はうごかない。彼にとつて重要なことは社会の改革ではなくて道徳教育であり、個性の伸張であつたのである。

① Autobiography, pp. 138~41. 訳書一九八頁—二〇一頁。

② コントからミルが学んだ他の重要な概念は「逆演繹法」であるが、この点については『論理学体系』第六巻、松浦孝作訳「道徳科学の論理」二〇五、二二〇—二二三頁および出口勇蔵『経済学と歴史意識』弘文堂版、三〇六—八頁参照。

③ Autobiography, pp. 12~4. 訳書一〇二頁。

④ ミルの原理は初版が一八四八年、二版四九年、三版五二年、四版五七年と版が重ねられ、その度にいくらかの改訂がなされている。その中とくに三版においては、社会主義に関する叙述において著しい改変がみられる。このことは、初版が四七年末に擲筆されたものであり、二月革命という大きな出来事を経過したのちの、ミルへのその影響を示すものであらう。以下の論述はこの点を念頭においていることはいうまでもないが、以下の引用部分は三版以後殆ど変更されていない。

なお、ミルの社会主義観の変遷については、福原行三氏のたねんな研究がある。「J. S. ミルの社会主義思想についての一考察」大阪府立大学紀要・人文・社会科学篇第四巻所収（一九五六年）ならびに「John Stuart Mill and Socialism」同紀要、第一巻（一九五七年）また、I. W. Mueller, John Stuart Mill and French Thought, 1956. 中の第六章「The French Revolution of 1848, pp. 171~224.」にも同様な問題が扱われている。

⑤ この様に彼の思想を変化せしめた他の有力な原因は、のちに彼の妻となつたテラー夫人の影響である。それについては自伝に詳しい。Autobiography, pp. 207~11. 訳書二八七—九〇頁。又、Packer は、その著 The Life of John Stuart Mill, 1954. の中で、とくに一八四八年の出来事が彼女に与えた影響の甚大さを強調し、原理二版刊行に際して、彼女はミルに「社会主義及び共産主義に対する彼の反対を全て廃棄する様に説得し、」結局ミルが譲歩したといっている。更に、ミルの、夫人に対する評価が過大であるという見解は種々あるが、自伝や彼等の手紙などから推して、彼女の卓越は、彼自身がのべているよりもずっと完全なものであらつた、と云つてゐる。Ibid., pp. 312~17)



ibid., pp. 218~35. 同書 三二一―五五頁。

(5)

ところで、わたくしはミルの社会哲学についてかたりながら、ある程度までその社会科学方法論にふれざるをえなかつたし、更に先走つてその具体化である経済学についても若干の考察を試みた。しかし、この問題については『論理学体系』第六卷「道德科学の論理」において社会科学の方法論として明截のべられているので、より明確な考察を彼自身をしてかたらせてみよう。

彼によれば社会科学の研究には二つの種類がある。即ち、一定の社会状態において、一定の原因の生ずる結果は何であるかという問題を解決するところに成立する「特殊社会学的研究」と、一般に社会状態を生ずる原因は何か、その特性となる現象は何か、を問題にして成立する「一般社会学」とである。<sup>①</sup>

ところで特殊社会学として、彼は経済学をあげているが、経済学は「富の追求から生ずる社会生活の諸現象のみを問題とする。」しかし「富を追求する人間の行為が、最初の労働と克己心とを以つて最大の富をえようとする欲望以外に副次的に他の性質の影響をもちうることは周知のことである。だから「人間をただ富の獲得、消費をこととしてゐるものと考える」経済学の結論は「他の原因からどの程度に影響されているかを正確に酌量し訂正するまではそのかぎり真の事象の説明や予言に適用することはできないだらう。」<sup>②</sup>即ち、仮説の域を出ることはできない。だから、まず、この人間の一定の心理に、極めて

⑥ 分配の問題は、ミルが最も重視したところであるが、『原理』第二部「分配論」において、物理的真理によつて規定される生産の法則と、人為の制度の問題である分配の法則とをはっきりと区別している。Principles, pp. 199~201. 訳書Ⅱ、五一―八頁。かれによれば、これは古典学派が分配の歴史的社会的条件を無視してそれを人間の意志をもつては如何ともしがたいとみなした誤謬と社会主義者が生産の合理的法則を忘れて、その歴史的改革を無制限に主張した点においておかした誤りとを、いづれをも排除しかつ肯定的部分を摂取したというのである。この様に分配を歴史的なものとみなし、人為の制度の問題としたことは、彼のいわゆる「旧派の経済学者」と大いに異なる点であり、それは彼の経済学執筆の意図の最も集中的に示される部分である。この様に相容れない二学説の調和と折衷を試みたことに、彼の問題解決の態度が示されるとともに、またそれこそが四八年の経済学の課題であつたことを思うべきである。

⑦ Principles, pp. 207~10. 訳書Ⅱ、一七―二二頁。

⑧ ibid., pp. 208~9. 同書 一八一―二〇頁。

⑨ ibid., pp. 349~50. 同書 二五八頁。

⑩ これが有名な労賃基金説であり、(のち一八六八年ソーントンの反駁によつて拋棄されるが)その、労働運動に対して果した阻止的役割は看過すべからざるものがあつたといえよう。なお、彼は人口問題については、かなり強い語調を用い「何人といえども、他人に養つて貰わねばならぬような子供を産む権利はもつていない。」「通常の自発的な制欲の動機がない場合にはその代りとして：結婚の制限(ドイツの或二、三の州に現に行われているのと少くとも同じ程度の)を行うか、または子を養い得ない者が子を産んだ時は厳罰に処するという規定を設ける必要がある」とまでいつてゐる。ibid., pp. 364~5. 同書二八二―三頁。

⑪ ibid., pp. 210~11. 同書 二一〇―二二頁。

⑫ ibid., p. 217. 同書 二一〇―二二頁。

尤も、私有財産制の中でも相続は不労の所得であり、土地は労働の所産ではないとして、相続権・土地所有権については制限をもうけている。

大きい影響を及ぼすもの（国民性や社会状態）を考察することが必要となる。<sup>①</sup>それは一般社会学Ⅱ社会哲学の課題とされ、経済学以前にとらえられねばならない。ミルにおける社会哲学は、まさにそのようなものとしての位置づけを与えられる。

ところで、この経済学の前提となるもの（Ⅱ国民性や社会状態）は、社会哲学のなかでいかにとらえられているか。彼によれば、「歴史の証明と人間性の認識とが相一致して」示していることであるが、社会進歩にとつて殆ど絶対的なものは、人類の思索的能力である。即ち「どんな場合にも知識の程度がその時可能なる産業の改良の限界であり、従つて、産業の進歩は知識の進歩に従いまた依存しなければならぬ」<sup>②</sup>。

また社会結合の形式を決定するものは共通の世論の性質であるというのである。

つまり思索的能力の状態がその社会の物質的状态を、また精神的政治的状态を本質的に決定する。歴史上、大きな社会的変革がおこる場合、つねにその先駆としてその社会の世論に、思考様式に大きな変化が存在した——「多神教、ユダヤ教、キリスト教、プロテスタンティズム、近代ヨーロッパの批判哲学、その実証科学——これらはいずれも、それぞれの相つぐ時代における社会状態をつくりあげる主要な動因であつた。」

「かく幾重にも重なつた明証から、……人類進歩の秩序はそのあらゆる点において、主として人類の確信ある知性における進歩の秩序に依存している」とミルは結論する。<sup>③</sup>

要するに、経済学は社会哲学を前提として成立するものであり、しかもその社会哲学においては人類の思索能力を以つて社会状態決定の要因とみなしているのである。

ここに彼の社会に対する認識の仕方が、即ち人間の知的道德的な面の向上がまずなされなければ、現実の問題は決して解決されえないとする根本の立場が示される。具体的にはすでにみてきたところであつたが、かかる立場からみちびき出される結論は、つねに、現実の社会悪を改めるよりも個性の伸張をはかることが重大であり、現実の社会の変革ではなくして人智の向上をはかることが問題である、ということであつた。<sup>④</sup>

① 松浦孝作訳『道德科学の論理』一一七頁。

② 同書、二〇九—一〇頁。

③ その為には「政治的、エソロジー」ともいうべきもの、即ち一時代、一国民の性格の型はいかなる原因によつて規定されるかという理論」が必要だとミルはいう。（同書、二二二頁。）この政治的エソロジーは社会学にぞくする全ゆる部門のうちでも最も発達のおくれた部分であるが、実は社会学を分類した全ゆる部分のうちでも最も包括的であり最も重要なものだ、ともいつている。しかし、彼自身によつてそれ以上この政治的エソロジーの理論についてべられることはなかつた。

④ 同書、二三〇頁。

⑤ 同書、二三〇—三一頁。

⑥ この様に観念的な歴史の把握は、経済的下部構造からその時代の意識を説明したマルクスとはまさに逆である。マルクスにあつてはミルの社会哲学において扱われる問題が、じつは経済学の中で問題にされるところに根本的な差異が見出されるのである。

ここに総括するならば「個性の伸張」⇨「個人の成長」が、じつはミルにとつて社会体制批判の基準として用いられているということ。

この「個人の成長」は先にふれたベンサムの利己心の変形、内的教養重視のさい、その根底におかれていたものである。彼にとつては、この「個人の成長」こそ最大多数の最大幸福のうらづけになつてゐる。人間としての成長⇨個性の発展⇨社会生活の多彩⇨(個人の幸福)⇨最大多数の最大幸福。(これを基盤として「自由の原理」が成立する。即ち、この様な個人の成長のためには自由が必要であるから――。このうらづけ、これが「危機」以後のミルの基調をなす。)

従つて、最大多数の最大幸福を目ざして社会改革が必要とされる場合にも、その前提として個性の伸張、人智の向上がなされねばならないということになる。

それ故、社会主義・共産主義の検討における第一の問題点は、そこにおいて「個性の伸張が行なわれるか」ということであつた。そればかりでなく当代イギリスにおいてさえ、個性の伸張が阻まれる様な事態がおこりつつある、即ち「多数者の暴虐」が憂うべき事実として彼の目に映じたのである、この点は彼の視角を端的に示すものとして重要だと思われるので、少し長くなるが引用してみよう。

彼は『ベンサム論』の中で、ベンサムを批判して次の様に云う。『人類が彼等の中の多数者の絶対的権力の下に在ることは、凡ての時と場所

とを通じて善いことなのであらうか?……与論の専制の下に在ることは、凡ての時代凡ての国民に於て、人間に適当な状態であらうか?」

ベンサムの時代にあつては、政府によつて多数者が到る処で不当に抑圧されていた。近代ヨーロッパにおける諸々の貴族政府は「少数者の私利と安逸との為に全社会の完全な犠牲の上に……打立てられた」のであつた。従つてベンサムの政治理論は多数者が圧迫された時期においてラディカルズによつて受容られたのだ。しかし「凡そいかなる社会においてもその多数者は凡て同一の社会的地位にあり、また主として同一の職業をもつ人々、即ち不熟練手工労働者から成立つてゐるに違ひない。……同じ境遇と職業のあるところには、また同じ不公平と激情とがあるであらう。而して、何れか一組の不公平、激情、偏見に絶対的権力を与えて、別種の不公平、激情、偏見に基づく平衡力を対立させることがないならば、それは前者のもつてゐる如何なる欠陥の匡正をも絶望的とする所以である。また狭隘卑賤な人間性の一つの型を普遍的永続的とし、人間の智的道德的性質のそれ以上の進歩に役立つ一切の努力を粉砕する所以である」<sup>⑨</sup>。

彼のいいたいことはこうだ。ベンサムの時代には地主、貴族層が人類を不当に抑圧して来た、従つて「大多数」は文句なしに正しかつた。けれども今は異なる、大多数しかも「狭隘卑賤な」一つの型をもつ大多数が社会を支配しようとしてゐるではないか。かかる多数者の絶対的権力の下におくことは社会の進歩を阻害するものである。従つて、現代においては、ベンサムの如く手ばなしに「多数者」を主張すべきではない。<sup>⑩</sup>(この「多数者」の問題は周知の如く後の『自由論』の中で更



に展開される。)

いうまでもなく、ベンサムの「多数者」はブルジョアジー以外の何ものをも意味しなかつた。しかも地主層に対するかぎりでの、ブルジョアジーとプロレタリアートの一応の結合は、「最大多数」を言葉どおりのものとして通用することを可能ならしめた。しかし、前述した様に三〇年代を転機とする再生産軌道の確立、階級の再編成は、新しい時代の問題を展開する。即ち新旧両支配層に対立する最大多数——ますます増大し、成長する労働者階級。ここに手ばなしの最大多数の主張は修正されなければならず、しかも大多数者の状態、要求をも早無視することはできない。

かかる問題に立ちむかうミルは、あく迄も公平に客観的に考察をすすめようとする。しかしそれは、いうまでもなく彼の社会的実践——階級的認識の上に立つて行なわれたものに他ならない。彼の体系の調和——折衷性も、単にミルの良心、寛大さなどのみによつて説明さるべきではなくて、先にのべた時代の問題に対処する新支配層の視角というものがあつたことを看過してはならないであらう。

以上の如き視角と論理構造をもつていたとはいえ、彼が社会の改革を問題としなかつたのではなく、むしろ時代の問題をつよく感じとつていたればこそ、従来の純粹にブルジョア的なイデオロギーであつたベンサミズムを、そのもつとも正統に属する彼が——幼少のころよりベンサミズムの寵児として純粹にその雰囲気の中に成長した彼が——修正し、また社会主義を窮局の理想としてはみとめたのであつた。そしてこの点にこそ、一八四八年をさかいとするブルジョアジーの支

配の確立と、プロレタリアートの無視しえざる勢力との対抗、その理念的反映としての、一方における単なる資本主義の辨護論と、他方における社会主義思想との対抗。そこにおけるミルの位置づけがうかがえるのである。

要するに一九世紀中葉のイギリスに与えられた問題は、労働者階級の問題であつたにも拘らず、世界の工場としてのイギリスの地位は確立され、かつとりわけイギリス労働運動は先きのべた様な一つの転回点に達していた。従つて、社会問題には大きな関心をよせつつも、彼は極めて安定した自信の上に社会主義への同情を示しながら、なおかつ私有財産制そのものを、その枠の中で改良するという基本線を脱することはなかつたのである。即ち、それは、ヨーロッパにおける当時の最進国として他国の犠牲において自らの矛盾を軽減した国イギリスの、ブルジョアジーの立場から示された一つの調和の体系であり、それ故に当代イギリスにおいて大きな意味をもちえたのである。

① 「ベンサム論」前掲訳書五三頁。

② 同書、五四頁。

③ 同書、五三—五四頁。